# 今後起こりうる大災害への備え
# 「災害文化」が教えてくれること

**中央本部では、「大震災を忘れないで」との思いから、被災地への取材を続け、公益財団法人ＪＫＡの補助により制作した、教育専用サイト「てらこあん」で情報発信を行っています。この中で取りあげた「災害文化」という考え方、その一部をご紹介します**

今年3月で東日本大震災から満7年となります。多くの被害をもたらした大災害から私たちは何を学んだのでしょうか。今現地では「災害文化」の継承と伝播に力が注がれています。実は「災害文化」は阪神・淡路大震災以前よりある考え方です。

今回、岩手大学地域防災研究センター災害文化部門の山崎友子教授に「災害に関わって生まれ、広がっていく意識・精神性・技術等を『災害文化』と呼びたいと思います。そして被災地から学ぶことが、今後も起こりえる大災害への備えとして重要」とのお話をうかがいました。

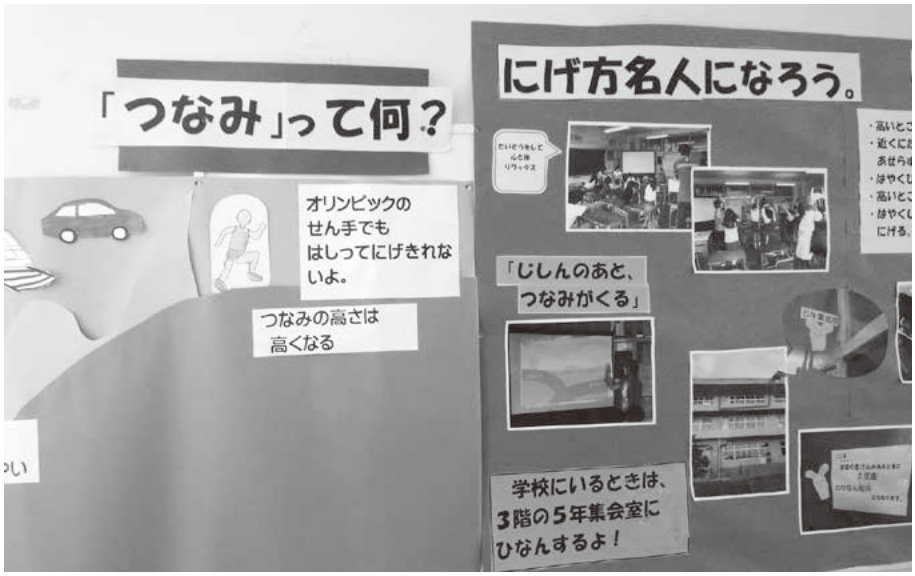
では、被災地から学ぶとは、例えばどういうことなのでしょうか。

取材で訪れた宮古市田老地区には、海面から10mもある「万里の長城」と呼ばれた大防潮堤がありましたが、大津波はこれを乗り越え、多くの人命を奪いました。日頃から津波を警戒していた地域でさえ、津波警報の後に正確な情報が流されなかった等、多くの課題があり、大防潮堤というハードだけではなく、ソフト面での対応を根付かせておく必要性が高まりました。

こうしたソフト面の強化の一つとして、現地の学校では通常のカリキュラムの中に「災害文化」を取り入れています。家庭科なら炊き出しメニューや緊急持ち出し袋の作製、社会科で町の地図作りを、図工で立体模型作りなどもできます。さまざまな角度から災害や防災にふれることで、理解は深まっていきます。

そしてもうひとつ大切なのは、地域ぐるみの対応策です。防災は「地域特性を知ること」がとても重要です。正しい防災知識を身に付けるには、住んでいる地域の地理や歴史、文化などを知る必要があります。発生しやすい災害も異なり、人口密度や道路状況なども地域によって異なるからです。

皆さんの住む地域。過去にどんな災害がどのように発生したかをご存知ですか？それを知る、知らないによって、災害時の判断が変わる可能性は高いのです。また住民の判断がバラバラになっても適切な避難ができなくなります。地域ぐるみで対応を図るという意味はそこにあります。



津波の危険性や避難のしかたなどを伝える掲示板（宮古小）

当ホームページでは、小学校の教育課程と「災害文化」、地域のネットワークづくりを、見事に融和させている岩手県宮古市立宮古小学校の事例も紹介していますのでぜひご参考ください。

てらこあん